第Ⅱ部
紡がれる物語——社会主義と戦争のもうひとつの記憶

特集1 紅い戦争の記憶——旧ソ連・中国・ベトナムを比較する

ハティニ虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶

越野　剛

はじめに

一九四三年三月二二日の午後、ベラルーシの首都ミンスクから数十キロほど離れたハティニ村はドイツ軍部隊の襲撃を受けた。村人たち全員を一軒の納屋の中に追い立てると、ドイツ兵はガソリンをまいて無慈悲にも建物に火を放った。閉じ込められた人々は焼き殺され、かろうじて逃げ出した者も機関銃の餌食となった。一四九人の村人が殺され（七五人は子供）、一人の男性と数人の子供だけが生き残った。同日の朝、付近でドイツ軍部隊がパルチザンの攻撃にあって指揮官を殺される事件が起きている。殺されたのはベルリン・オリンピック（一九三六年）の砲丸投げ

金メダリストのハンス・ヴェルケだった。その前日にパルチザン部隊がハティニ村に宿泊していたこともあり、事件への報復措置として村人が皆殺しにされたと考えられている。

ハティニの虐殺事件は、今日のベラルーシだけではなく、ロシアや旧ソ連地域でよく記憶されている。本論では一九六〇年代後半の戦争の記憶化の時代に焦点を合わせて、大規模なメモリアル施設の設立と作家アレシ・アダモヴィチによる文学作品がそれぞれ異なる方向からハティニをめぐる記憶を創り出した経緯を分析する。ロシア・ソ連の中央からの眼差しとは異なり、ナチスドイツとの戦争の境界領域における特異な体験を経たローカルな記憶の特殊性（オルタナティブ）にも目を向ける。ソ連崩壊後のベラルーシにおいても戦争の記憶は根強く残り、ルカシェンコ体制のもとでの政治利用も続いている。社会主義時代から現在への連続性と不連続性に関しても考察したい。

Ⅰ 虐殺の記憶の形成

ソ連邦の西端に位置するベラルーシは一九四一年六月の独ソ戦争の開始とともにナチスドイツの電撃戦によって占領され、一九四四年七月のソ連軍による大反撃が始まるまで三年あまりも支配下におかれていた。住民の中にはパルチザンを密かに支援したり森に逃げ込んで抵抗活動に合流する者がいる一方で、対敵協力者（コラボレーター）として占領軍の統治に協力する者もおり、同じ村の住人同士の間でも複雑な対立と疑心暗鬼の関係を生み出すことになった。そのためベラルーシにおける戦争の記憶をあつかう文芸作品には正規軍の戦いを描くだけではなく、占領下の民間人の厳しい生活や非正規軍（パルチザン）の活躍を物語るものが多い。現在のベラルーシにおいて独ソ戦争の記憶を代表する場といえば、ナチスドイツの奇襲攻撃を受けて絶望的な防衛戦を展開したブレスト要塞のメモリアル（西部国境付近）、パルチザンの抵抗活動を展示の目玉とするミンスクの大祖国戦争博物館と並んで、民間人の犠牲者を追悼するハティニの記念施設が何よりもまず挙げられるだろう。

ハティニ村の虐殺はナチスドイツがベラルーシで行った多くの戦争犯罪の一例にすぎない。六〇〇以上の農村がハティニと同じように焼き払われ、住民が皆殺しにされている。戦時中にベラルーシが失った人口は約二二〇万人といわれており、ソ連全体の犠牲者数が約二七〇〇万人とされるのに比べれば少ないようにも見える。しかし戦前のベラルーシ地域の人口が九二〇万人程度であったことを考慮すれば死者の割合は高く、住民の四分の一が失われたという

言い方がしばしば用いられるほどである。[*1] ハティニはそうした戦争の悲劇の総体を代理表象する場として機能している。

破壊された無数の村のひとつでしかなかったハティニの名前が有名になるのは、殺戮の跡地に広大なメモリアル施設が建設されてからである（一九六九年オープン）。戦争文学のジャンルで有名な作家のアレシ・アダモヴィチが果たした役割も大きい。ハティニのメモリアルが建設されるのに合わせるように、小説『ハティニ物語』（一九七一年）を書き、その後、作家のヤンカ・ブルイリとウラジミル・カレスニクと共にベラルーシ全土を回って集めた被害者たちの証言を『燃える村からきた私』（一九七五年）にまとめた。映画監督エレム・クリモフはアダモヴィチの小説をもとにして、映画『行け、そして見よ（邦題：炎六二八）』を撮っている（一九八五年）。これらの作品はベラルーシの農村におけるナチスの破壊行為をハティニのようなひとつの場所に特定することなく描写しており、ハティニはむしろ複数の戦争の記憶を単一にまとめて代表するシンボリックな名前となっている。

ハティニは大祖国戦争の犠牲者を追悼する儀礼が開催され、ソ連への外交使節が訪問すべき場所のひとつとなった。ソ連が戦争に勝利するために払った甚大な犠牲としてハティニはベラルーシを位置づける。ナチスドイツという明瞭な「敵」が設定されていることもあって、ソ連全体としてはもちろんベラルーシだけをとってもハティニ事件は戦争の記憶を国民の政治的統合に導きやすい題材だった。ソ連崩壊後も、ルカシェンコ大統領の主導のもとハティニ記念施設の大規模な修復作業が行われ、二〇〇四年七月一日にはロシア大統領プーチンとウクライナ大統領クチマが参列して施設のリニューアルを祝う式典が開催された。ルカシェンコ大統領はソ連へのノスタルジーを公言したり、ロシアとの「連合国家」を模索する一方で、ベラルーシが独立を失ってプーチン体制のロシア連邦に吸収されることには強く抵抗している。ソ連とベラルーシという二つの枠組みのどちらの文脈に置かれても肯定的なイメージを提供するハティニの記憶は、現在のベラルーシの政治指導者にとって極めて都合のよいものと考えられる。

Ⅱ 社会主義体制の終焉と公的な記憶の競合

他方でソ連崩壊前後の時期からベラルーシにおいてはハティニとは異なる位相で戦争の記憶を伝える場が現れてきた。ソ連末期のペレストロイカの時代、一九八八年六月に考古学者ジャノン・パジニャク（ロシア語名はゼノン・ポズニャク）によって、ミンスク郊外のクロパティの森に無

数の遺骨が埋められていることが明らかにされた。[*22] 犠牲者の数は七〇〇〇人という見積もりから二五万人以上という説まで幅があるが、遺骨と一緒に出土した衣服や薬きょうなどの調査のおかげで、一九三〇年代末から四〇年代初頭にかけてソ連の秘密警察によって秘密裏に銃殺された人々だということはほぼ確実視されている。第二次大戦の勝利の記憶や社会主義時代にノスタルジーを抱く世代の中には、クロパティの殺戮は一九四一年以降ベラルーシを占領したナチスドイツによるものだという意見もあるが、そうした主張の根拠は弱い。犠牲者の多くは一九三九年九月の独ソ両国によるポーランド侵攻でソ連に併合された現在のベラルーシ西部地域から連行されてきたと見られている。

ハティニの場合と対照的なことに、クロパティでは、ナチスドイツではなく、ソ連当局によって多数のベラルーシ人が殺害された。したがってペレストロイカ期にはベラルーシのソ連からの独立を渇望する民族派知識人にとって、クロパティは政治的に大きな意味を持つ場所となった（写真1）。とりわけ前述のパジニャクが党首となって一九八八年に結成されたベラルーシ人民戦線は、ベラルーシ語の保存・振興、チェルノブイリ被災者の救済と並んで、クロパティ事件の解明と追悼を主要な政治目標としていた。クロパティの森には無数の十字架や石碑が建てられ、ハティニのようなオフィシャルな施設とは違うオルタナティブな記憶の場を形成した。ソ連崩壊後も、親ロシア政策をとる現ルカシェンコ体制に抵抗する野党活動家がしばしばクロパティで政治集会やデモンストレーションを行っている。クロパティの記憶は社会主義時代に形成された公的な戦争の記憶に挑戦するものではあるが、「敵」の対象をヒトラーからスターリンに移したというだけで、その政治的な機能はハティニとよく似ている。クロパティとハティニの対立はソ連崩壊後の政治的な分裂を反映しており、両者が公的な記憶の場を競い合うものと見ることもできる。

写真1　クロパティの森

（出所）田村容子氏撮影　2013年9月

ベラルーシの戦争災害を正しく代理表象するものとみなされてきたハティニの記憶にもいくつかの疑問符が投げか

けられ、その正当な地位が揺るがされてもいる（Rudling 2012）。戦時中にナチスが獲得した広大な占領地をドイツの治安組織だけで統治するのは困難であり、現地の協力者（コラボレーター）を登用した警察補助大隊が各地に創設された。ハティニ村を襲撃した主力は第一一八大隊という残虐なふるまいで悪名高いグループで、その構成員の多くはウクライナ人であり、ロシア人や現地のベラルーシ人も含まれていた。ベラルーシ、とりわけウクライナではソ連からの独立を目指す民族主義者の少なからぬ部分がナチスの協力者となったことが知られている。ハティニの虐殺を指揮したのはウクライナ出身のグリゴリイ・ヴァシュラという人物で、驚いたことに戦後は正体をかくしてソ連にとどまり、一九八六年になってようやく逮捕されて死刑の判決を受けた。虐殺の数少ない生存者は当局の調査に協力して、襲撃者がロシア語やウクライナ語を話していたことを証言しているし、ヴァシュラ以外の第一一八大隊のメンバーも裁判にかけられている。ゆえにウクライナ人やロシア人が虐殺に深く関与していた事実は知られていたはずだが、ソ連時代には公表されることはなかった。社会主義末期の一九九〇年になって、センセーショナルな歴史の見直しの一環としてハティニ虐殺の実行犯についての真相がようやく新聞報道をにぎわすようになる。

さらに衝撃的な仮説としてしばしば語られるのは、第二次世界大戦中にソ連領内で多数のポーランド軍将校が虐殺された「カティンの森事件」との関連である。カティンで見つかった遺体はクロパティと同じようにソ連の秘密警察によって処刑されたものであるが、ソ連当局は長い間これをナチスの仕業だとして認めなかった。カティン（ロシア語ではカティニ）と音声的に似ているハティニをナチスの戦争犯罪の証拠として大きく宣伝することで、カティンの印象を操作しようとしたのではないか。そうであるなら何百、何千とあるベラルーシの破壊された農村の中から、わざわざハティニが選ばれた理由を説明することができる。そのような政策決定の事実を示す証拠が見つかったわけではないが、九〇年代以降この仮説はしばしば語られるようになっている。

歴史家のイーゴリ・クズネツォフの監修により制作された記録映画『ハティニの真実』（二〇〇八年）は、第一一八大隊の果たした役割やカティンとの名前の類似に焦点を当て、ソ連時代に確立したハティニ事件の公的記憶に疑問を投げかけている。[*3] 現在のベラルーシの少なくとも知識人の間では戦争に関する記憶はソ連時代のように一枚岩ではない。社会主義時代との連続性を強調するルカシェンコ大統領のもとでは、こうしたオルタナティブな言説が広く普及することは考えにくいが、公的な記憶をめぐる競合は今後も続くことが予想される。

Ⅲ 記念碑に見るハティニ事件

ハティニの跡地に戦争のメモリアル施設を作るという計画が初めて文書中で立案されたのは一九六五年末にさかのぼる（Адамушко et al. 2009: 4）。翌年には建設作業の着工が承認され、ベラルーシのナチス占領からの解放二五周年となる一九六九年七月に完成記念式典が行われた。フルシチョフに替わるブレジネフ体制下の一九六〇年代後半には、ソ連各地で公的空間における戦争のコメモレーションが大規模化していった（Tumarkin 1994: 125-157）。モスクワのクレムリンのそばにある無名戦士の墓やヴォルゴグラード（旧スターリングラード）の巨大な母国像が建てられたのは一九六七年であり、ベラルーシ西端のブレスト要塞のメモリアルが完成したのは一九七一年だった。終戦二〇年の一九六五年には、五月九日の戦勝記念日が休日と認められた。今日のロシアやベラルーシにおいて戦争の記憶と結びついてイメージされる公的な時空間の多くはこの時期に形成されたものと考えてもよい。

ハティニのメモリアル施設は個人のレベルから共和国の規模にいたるまでベラルーシにおける戦争被害をさまざまな位相で追悼している。[*4] 敷地の中心には死んだ子供を抱く父親の像が建っており、「不屈の人」と呼ばれる（写真2）。これは数少ない生存者の一人ヨシフ・カミンスキーがモデルにされた。破壊された二六軒の家屋の跡には焼け残ったかまどを思わせるオベリスクが置かれ、それぞれの家の住民の名前がプレートに記されている（写真3）。オベリスクの上に吊るされた鐘は三〇秒ごとに追悼の音を響かせる。殺戮の場となった納屋はその屋根の形を模したモニュメントに姿を変えた。

本企画の前田論文で述べられているように、ソ連の戦争記念碑の多くは勝利を称える顕彰を目的としており、ハティニのような追悼のメモリアルは少数派である。ベラルーシはナチスによる長期の支配を経験しており、大量の民間の犠牲者が出たことを戦後の政治が無視できなかったのであろう。実はメモリアルの設置が決まる前のハティニには「嘆きの母」という記念碑が建てられていた（一九六四年、写真4）（Адамушко et al. 2009: 4）。ところが巨大施設の工事が決まると、女性像は取り除かれ、代わりに男性像である「不屈の人」がメモリアルの中心に設置されることになった。女性のイメージによって追悼（嘆き）の意味が過剰になることが嫌われ、被害者でありながらも抵抗の意思を明示する男性像に置き換えられたことは、戦争の記憶政治に関するジェンダーのバランスを考慮するうえでも興味深い。

写真3　オベリスク　（出所）田村容子氏撮影　2013年9月

写真2　不屈の人

（出所）田村容子氏撮影　2013年9月

ここまでが第一期工事で実現した部分だが、工期の後半ではハティニ村だけではなくベラルーシ全土の戦争の記憶をシンボライズする多くの記念碑が加えられた。これには当時のベラルーシ（白ロシア）の党第一書記で、戦時中はパルチザンの指導者でもあったピョートル・マシェロフによる後押しがあったとされる（Адамушко et al. 2009: 5）。ハティニと同様に滅ぼされた一八五の村の名前を記した墓標が作られ、それぞれの焼け跡の土が収められた（写真5）。終戦後に何らかのかたちで再建された四三三の村を象徴する「生命の樹」（写真6）や、強制収容所と集団処刑の場を示す「記憶の壁」も印象深い。「永遠の火」のモニュメントは四人に一人が亡くなったというベラルーシ全体の犠牲を表現しており、そのかたわらに並んで立つ三本の白樺

写真4　「嘆きの母」の像と生存者ヨシフ・カミンスキー

（出所）Адамушко et al. 2009: 231

が生き残った四分の三の住民を意味している（写真7）。ハティニのメモリアル・コンプレクスは訪れる人々が複数の次元の集合的記憶のいずれかに自己同一化できるような仕組みになっていると言えよう。戦火に倒れた親族や先祖の追悼にも、失われたソ連へのノスタルジーにも、独立ベラルーシのナショナリズムにも応えられるように。

Ⅳ 文学と映画に描かれたハティニ事件

アレシ・アダモヴィチはベラルーシだけでなくソ連の戦争文学を代表する作家として広く知られている。まだ十代中頃だった第二次大戦中にパルチザン部隊に加わって戦い、その体験をもとにした小説『屋根の下の戦争』（一九六〇年）で作家としてデビューした。ハティニの虐殺をテーマにした一連の作品のほかに、ダニール・グラーニンとの共著で、レニングラード包囲で極限状況に追い込まれた市民の苦難の記憶を聞き取り調査に基づいて描いた『封鎖の書（邦訳：封鎖・飢餓・人間）』（一九七七～八一年）がよく知られている。

『ハティニ物語』は一九六六年から七一年にかけて書かれており、ちょうどメモリアルの建設期間と重なってい

写真5　村の墓標　（出所）田村容子氏撮影　2013年9月

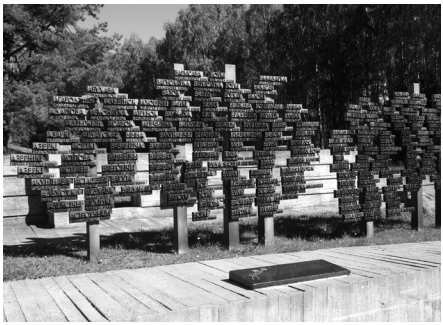

写真6　生命の樹　（出所）田村容子氏撮影　2013年9月

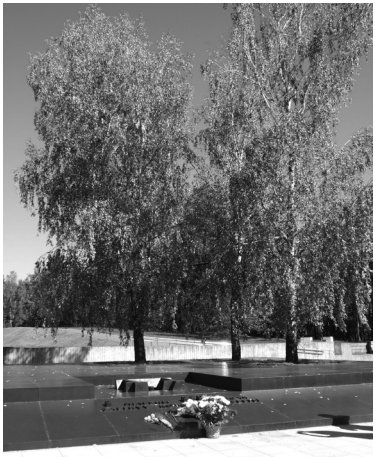

写真7　三本の白樺

（出所）田村容子氏撮影　2013年9月

る。主人公のフロリアン・ガイシュンは研究施設で勤務する心理学者である。パルチザンの少年兵だった戦時中にフロリアンはハティニと同じようなナチスによる虐殺の場面を目撃した。小説における現在は一九七〇年頃に設定されており、主人公は二五年ぶりに再会した戦友たちと一緒に、完成したばかりのハティニのメモリアルを訪れる。目的地にたどりつくまでのバスの中でフロリアンは戦時中の過酷な体験を思い出す。その回想が小説の主要な内容となっているが、深刻なトラウマ体験の周りを迂回するかのように主人公の意識の流れは現在と過去を往来し、複雑な時系列を構成している。

第一の時系列はハティニに向かうバスの中ですごす現在の時間で、物語全体の外枠になっている。第二は戦時中の記憶で、その中心にナチスによる虐殺の目撃体験が含まれる。第三は戦争が終わってからフロリアンが視力を失うまでの時期で、ヨーロッパ旅行や結婚などの出来事が回想される。第四は現在に近い時期の記憶で、教え子のボリスとかわした文明論的な対話がくりかえされる。第五の層に分類されるのは、ナチスによる殺戮を体験した人々の証言記録とナチスの将校による報告書である。ここだけはフロリアンの意識から外れており、記録文書的なテキストが挿入されている。

ちなみにアダモヴィチ自身が脚本を書いた映画版の『行け、そして見よ』では個人の記憶の中で現在と過去を行き来するような構成は省かれている。大人になった語り手は登場せず、戦時中の出来事はすべて少年の直接の視点から描き出される。その代わり、映画的な手法として興味深いのは、ペレホド村の虐殺の後、主人公がヒトラーの肖像画を撃つシーンである。少年が銃弾を撃ち込むたびに、第二次世界大戦やヒトラー演説などの記録映像が逆回転で映し出され、暴力の連鎖の歴史的源泉を暴き出してトラウマを解消しようとする。原作の小説で描かれるような個人の記憶ではなく、公的な領域に属する歴史の映像が用いられるのが特徴的である。しかし時間がさかのぼるにつれて、ナチス総統の家族や生い立ちなどの私的な領域が画面に映し出され、幼児のヒトラーを映した写真を前にして主人公はもはや銃弾を撃ち込むことができない。

1 感覚の喪失と記憶の不連続

戦闘で負った傷が原因でフロリアンが現在の時点で視力を失っていることは小説における記憶の描き方として興味深い。したがって語り手は二五年ぶりに会った戦友の現在の姿を見ることができず、代わりに思い浮かべることができるのは戦時中のイメージだけである。数十年を経ても視覚的な像は何の変化も被らずに残り続ける。目に見える記

憶の中の自己と視覚を奪われた現在の自己の意識は連続性を失っている。語り手が過去を思い出す場面の多くは、あたかも自分の体験とは無関係な映画を観ているかのように描かれている。たとえば、森の中の空地で赤いバッタの群れが雨のように降り注ぐ美しい情景が次の瞬間には爆撃の炎に変わってしまう。幻想と現実の入り混じったこのシーンはトラウマ体験のように何度もくりかえされる。フロリアンの盲目の闇がヴィジュアルな記憶を投影する映画の暗幕に喩えられていることも興味深い(Адамович 1982: 29-30)。

『ハティニ物語』の叙述は基本的に語り手の一人称で進行するが、あえてフロリアンが過去の自分を三人称で呼ぶ場面がある。フリョラ(フロリアンの少年時代の愛称)はパルチザン部隊からはぐれて、仲間の少女グラシャと二人で森をさまよっているとき、不意に墓石の後ろに機関銃をかまえたドイツ兵がひそんでいるのに気がつく。機転をきかせたフリョラは近くに味方がいるようなふりをして危険を逃れることができた。この出来事を回想する現在のフロリアンは、自分の命を救ったのが自分ではない第三者の少年であったかのような語り方をしている(Адамович 1982: 49)。死の一歩手前の恐怖の瞬間を思い出すとき、やはり記憶の中と現在の自己の不連続が露わにされている。

過去と現在の断絶という同じような構図は記憶の中の少年フリョラ自身もまた体験している。初めての戦闘で打撲傷を負ったフリョラは一時的に耳が聞こえなくなっている。そんな状態でフリョラが少女グラシャと二人で故郷の村に立ち寄ると、家屋がすべて焼き払われてしまっていた。意識下では家族が殺されたことを分かっていながら、少年は親しい人々の死を受け入れることができない。少女は過酷な現実を悟らせようと努めるが、フリョラの耳は物理的にも心理的にも真実を告げる言葉を聴くことができない。「彼は自分の失聴のかげに隠れていた。そのおかげで完全な真実は遠ざけられ、最後の希望が失われる瞬間が先延ばしされた」(Адамович 1982: 67)。家族がまだ無事だった過去と彼らが死んでしまった現在の間には亀裂が入り、聴覚を失ったフリョラは記憶の中の声だけを聴いている。興味深いことに現在の語り手が思い出す回想の中にいる少年が、さらに過去の家族との思い出を回想する。記憶の中の記憶という入れ子の構造になっている。一九七〇年現在のフロリアンが戦時中の自己との断絶を視覚の喪失によって強調するように、回想の中のフリョラもまた戦争前の自己との断絶を聴覚の喪失をきっかけにして体験している。ただしフリョラ少年が過酷な事実を受け入れると同時に聴覚を取り戻すのに対して、大人になった語り手が視覚を復活させることはできない。それはフロリアンが戦争で負ったトラウマ体験が容易に解決されるものではないことを意味するだろう。

2 恣意的な記憶の連続性

フロリアンの語りは決して直線的に進行することはなく、現在と過去の間の複数の記憶を不連続に往来する。視覚をまだ失っていなかった戦後の短い期間、彼は自分の目で見たものをしばしば戦争の記憶に結びつける機会があった。たとえば大学の授業でフロリアンは古代ギリシアの彫刻ラオコーン（写真8）を見て激しいショックを受ける。海蛇の怪物に巻きつかれて苦しむギリシア神話の人物像は、ドイツ兵によって残酷な拷問を受けて殺されたパルチザンの同志を思い出させたのだ。その仲間の死体は苦しみのあまり自ら引きずり出した腸を体に巻きつけていたという。

フロリアンがラオコーン像のエピソードについて、「自分はかつて見たことのあるものを見たというだけのことだ、ただしそれは複製ではなかった」（Адамович 1982: 122）と回想するのは興味深い。いわば現実の模倣である彫刻と、戦友の生々しい身体が対比されている。殺害されたパルチザン兵とラオコーンのつながりは、語り手にしか理解できない一回性の個人的な記憶に基づいている。その連続性はきわめて私的で恣意的なものだと言える。ハティニのメモリアル施設が戦争体験を複数のレベルの集合的記憶として喚起するのとは対照的である。

ラオコーン像をめぐる回想シーンは小説中で最もトラウマ的な記憶を物語る部分の中にはさみこまれている。フリョラはペレホド村の近くでナチス兵に捕まり、村の住民を皆殺しにする作戦に巻き込まれる。ハティニの虐殺がそうであったように、フリョラと村人たちは納屋の中に入るよう命じられ、扉が閉じられた後で建物に火が放たれる。トラウマ体験の核心が近づくにつれて、フロリアンの語りは本筋からそれやすくなり、記憶の中を行きつ戻りつジグザグを描く。「私の記憶はたえず納屋から離れようとする。記憶でさえ長くはそこに留まることができない」（Адамович 1982: 122）と語り手自身が認めている。記憶が

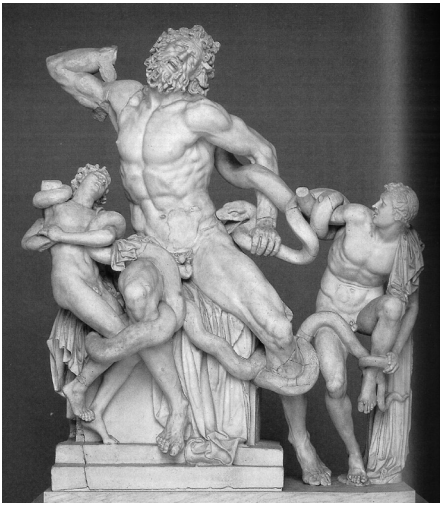

写真8　ラオコーン　（出所）スパイヴィ 2000: 376。

ジャンプする行き先のひとつが先に挙げたラオコーンの場面なのである。

ナチスの指揮官の気まぐれによって、フリョラは納屋の外に出ることを許され、その後の惨劇の一部始終を目撃することになる。指揮官は奇妙なことに小さな猿を飼っていて、無実の犠牲者が生きたまま焼かれる前でペットを愛撫している。その顔はせわしない猿の動きにじゃまされて見ることができない。フリョラは憎むべき敵の顔の表情を見てやりたいという強い欲望に駆られる。ここで現在の語り手のフロリアンは記憶の流れを中断させて、戦後に旅行したパリのルーブル美術館での回想に切り替えてしまう。

フロリアンが美術館の一室で見たのは、死んだ騎士を修道女たちが担いで歩く場面を彫刻で再現した中世の墓標である。フードで隠れて見えない老婆たちの顔が、猿の尻尾のせいで見えないナチスの指揮官の顔に重なり、フロリアンは「歯がないけれども満足げに歪んだ笑いが見えるにちがいない」と考えて、フードの下をのぞきたいという衝動を抑えきれない（Адамович 1982: 136）。二つの隠された顔の表情の間の連想は、語り手の私的な記憶に基づく恣意的なものでしかない。この彫刻は有名なフィリップ・ポーの墓標（写真9）を指していると思われるが、騎士の棺を実際に支えているのは男性であり、ここで語り手は勘違いをしていることになる。しかしフロリアンが「修道女」の隠された顔を見て強い衝動と共にナチスの指揮官と猿を思い出したという記憶のリアリティは疑いえない。生死にかかわるような深刻な体験を経た個人の記憶は、切れ目のないはずのところで亀裂を生じたり、一見して不連続な対象と連想によって恣意的に結びついたりする。個人の一回性の記憶を内的な論理で結ばれたひとつの全体として把握できるならば、バラバラに見える回想のつらなりが一貫性をもった語りとして立ち現れるだろう。

写真9　フィリップ・ポーの墓標

（出所）マール 2000: 168。

語り手の記憶の連想が常に恣意的に結ばれているわけではない。たとえば同じペレホド村の虐殺で、ナチス兵に犬

をけしかけられ、むごたらしく射殺された村人を目撃した場面を回想しながら、フロリアンは戦後になってからベオグラードの博物館でファシストによって処刑される直前のパルチザンの若者を映した写真を見たことを思い出す。死に往く男の浮かべる大胆不敵な笑みが（それは写真を通していつか親しい人が自分の姿を見ることを予期してのものだと語り手は推察する）、英雄ではなく虫けらのように殺されるペレホド村の住民と対比させられている。語り手が思い浮かべているのはユーゴスラヴィアのパルチザン、スティエパン・フィリポヴィチの有名な写真であろう（写真10）。この連想は必ずしも恣意的なものではなく、社会主義圏で広く共有される戦争の集合的記憶の枠組みに当てはまるものだと考えられる。しかしながらフィリポヴィチの写真の例とは対照的に、本来は無関係なはずのラオコーン像やフィリップ・ポーの墓標のイメージは恣意的に、つまり極めて個人的な記憶の迷宮を介してのみ戦争体験と連結されるのである。

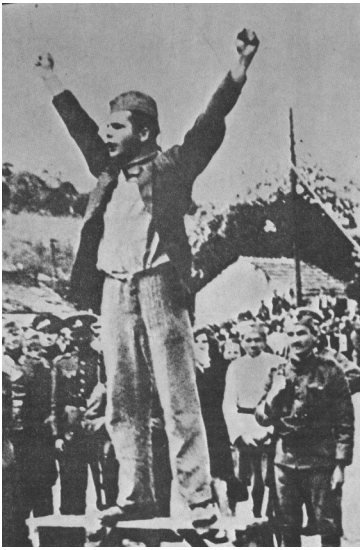

写真10　スティエパン・フィリポヴィチ

（出所）Vladimir 1990: 252

3 集合的記憶に抗うもの

オフィシャルな戦史や記念碑に表現される集合的記憶からこぼれ落ちてしまうような個人的な記憶にアダモヴィチの小説は焦点を合わせている。しかし一回性の私的な記憶がそれを体験した本人にとってしか意味を持ちえないものだとしたら、本来それ以外の他者には理解不能なはずである。記憶の恣意的な接合や断絶をそのようなものとして私たちが了解しえるのは、集合的記憶を論じたアルヴァックスが言うように、何らかの集団が共有する記憶の枠組みがあって初めて個人の記憶が成り立つからである。[*5] その媒介項としては家族や隣人など顔の見える範囲で基本的に構成されるローカルな集団を想定することができる。

その点で興味深いのはペレホド村の虐殺場面の中心に挿入される証言記録である。『ハティニ物語』はアダモヴィチの戦争体験に基づく部分もあるとはいえ基本的にはフィクションである。したがって「史実」から持ってこられたテクストは語り手フロリアンの個人的な意識の流れという

枠組みからは逸脱している。しかし一方では作中人物であるフロリアンの私的な記憶が、挿入された文書を通じて実在する人々の私的な記憶に接続されているとも考えられる。ナチスの襲撃から生き残った住民の証言は大枠においては互いによく似ているが、具体的なディテールは驚くほどに多様である。アダモヴィチの作品では、創作された物語から実在の人物の証言にいたるまで個人の記憶が何度もくりかえされることで、結果としてオフィシャルなものとは次元の異なるオルタナティブな集合的記憶が提示されるのではないだろうか。

たとえばレヴィシチェ村の生存者ナジェジダ・ニェグリュイの回想は示唆的である。彼女は自分の子供たちが殺された場面を覚えていない代わりに、燃えさかる家屋から逃げ出す際に自分がなぜか鉄鍋をいくつも抱えていたことをはっきりと記憶している（Адамович 1982: 132）。フロリアンの語りがそうであったように、トラウマ的な記憶はしばしば一見して瑣末な場面によって置き換えられる。ニェグリュイはナチス親衛隊の将校が小さな猿を肩に載せていたことを覚えている。猿が短パンを履かされていたというディテールまでが明確に思い出される。読者はここでフロリアンの回想に登場したナチスの指揮官を想起せずにはいられないだろう。フィクションとノンフィクションの境目が曖昧になり、ペットを愛撫しながら殺戮を命ずる指揮官というグロテスクな描写が、一回性の私的記憶として現実の領域を侵犯するかのようである。

『ハティニ物語』に挿入された証言記録を延長するようなかたちで、アダモヴィチは同僚の作家たちと共にベラルーシ全土で聞き取り調査を行い、『燃える村から来た私』（一九七五年）を出版する。ナチスによる虐殺を体験して生き残った人々の証言を集めたこの本は、ある種のオーラルヒストリーの試みと言ってもよい。石でできたモニュメントに対比して、生きた言葉で構成されたオルタナティブな記念碑である。そこで興味深いのは男性の証言者がえてして私的な要素を排除してオフィシャルな「戦史」の枠組みで語ろうとしがちである一方で、女性の語り手のほうが個人の一回性の体験を豊かに伝える能力を持っているとアダモヴィチ自身が認めていることである（Адамович 1983: 251）。オルタナティブな記憶の領域で女性の語りが優位を占めているという指摘は、公的な記憶の政治的操作とは対照的である。ハティニに大規模なメモリアルが建設される際に、「嘆きの母」の女性像が「不屈の人」の男性像に置き換えられたことを思い起こそう。ちなみに『燃える村から来た私』や『封鎖の書』のオーラルヒストリーの試みは、現代ベラルーシの作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの一連の仕事にも引き継がれている。

小説の終盤でフロリアンたちの一行はハティニのメモリ

アルに到着する。語り手はここでモニュメントに表現された記憶と個人の戦争体験を比較している。被害を受けた村や殺害された住民の数、四分の一の住民が死んだというおなじみの計算、ナチスの絶滅政策などといった解説が施設のガイドである若い女性によって提供されるが、フロリアンはこうした「客観的」な情報には距離を置いている。それよりも語り手は自分では見ることはできないとはいえ、メモリアルの中心にある「不屈の人」の銅像について思いをめぐらせる。子供を抱く父親の手は銃弾によって撃ち抜かれているはずだとフロリアンは独白する。ドイツ兵の銃口から子供を守ろうとした親が手に傷を負ったのを何度も目撃していたからである。「目の見える人たちにはそれが見えているだろうか」（Адамович 1982: 197）という語り手の問いかけは、モニュメントによってある種の集合的記憶が可視化される一方で、モニュメントが建てられることで目に見えなくなる小さな記憶が無数にありうることを示唆している。

結論——戦争の記憶から原発事故の記憶へ

こんな光景は映画でも見たことがなかった。焼かれた村は見たことがある。人々が森へ退去したり、あるいは力ずくで追い出されて死んだり、苦境に陥り、遠いドイツに連れて行かれたりして、空っぽになった村。そうした村には、記録映画であれ、芸術映画の中で複製されたものであれ、戦争の跡、破壊の跡が刻まれていたものだ。ところがここでは何もかも手入れが行き届いているのに、まるで誰にも必要ではなくなったみたいなのだ（Шамякін 2005: 156）。

これはベラルーシの作家イヴァン・シャミャキンの小説『不吉な星』（一九九一年）の一節で、チェルノブイリ原発事故（一九八六年）の影響で住民が避難して空っぽになった村を登場人物の一人が目にする場面である。このように無人になった村の姿を第二次世界大戦で破壊された村と対比して表現する方法は原発事故を描いた多くの文学作品に見られる。放射能という目に見えない危険で人が住めなくなるという誰も体験したことのない未知の状況を、ナチスドイツによる虐殺というなじみのある記憶を喚起することで、理解可能なカテゴリーに移しかえる試みであるといえよう。アダモヴィチの手法を受け継いだ現代の作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチは、さまざまな立場で事故を体験した人々の証言を集めた『チェルノブイリの祈り』を書いたが、そこに登場する老人たちの語りの多くもまた、原発事故の体験談だったはずのものがいつのまにか戦

争の記憶に切れ目なくつながってしまう。[*6] アダモヴィチが『ハティニ物語』で描いたように、ある種のトラウマ的な記憶は、一見して無関係な出来事であっても比較の糸口を見出しては形を変えて何度でも思い出されるものだ。

あるいはシャミャキンが描いた登場人物のように直接の戦争体験はない世代であっても、映画や小説の中でくりかえし再生産されることで戦争の集合的記憶はむしろ強化・純化されていく。今日では一千万人に満たないベラルーシの住民のうちの二百万人あまりが程度の差はあれ放射能に汚染された地域に住んでいると言われる。その統計そのものが第二次世界大戦と比較されて、ベラルーシ人の「五分の一」がチェルノブイリの被災者だという言い方がなされるほどである。

公的な統計で示される何百万という犠牲者の数字は決して軽視することはできないが、恣意的で意味のないようにも見えるディテールを伴う個々人の記憶のひとつひとつもまた恣意的であるがゆえに他に代えがたい一回性のメッセージを伝えてくれる。ブレジネフ時代にさかんに建てられた巨大なモニュメントの数々は、ソ連における第二次世界大戦の記憶を犯しがたい神聖なるものとして確立させ、停滞の時代に形骸化していく社会主義イデオロギーを補強した。アダモヴィチの文学はそこから漏れ落ちてしまう小さな記憶を集めてオルタナティブに提示する試みだったと言える。

ソ連崩壊後のベラルーシにおいては、社会主義時代の栄光と迫害の記憶を現在とどのように接続するか、あるいは断絶するかということが新たなアイデンティティの確立のための問題になってきた。ハティニのオフィシャルな記憶はソ連の勝利のためにベラルーシが払った犠牲として追悼と顕彰の大きな意味を担ったが、ソ連が消滅した後では意味を担う主体が何なのかが曖昧になっている（Ушакин 2011: 209-233）。ハティニ虐殺の下手人がウクライナ人や地元の対敵協力者であったことや、クロパティのようにスターリン体制による虐殺の犠牲者がある種の対抗記憶として浮上したこともまた、「他者」としての敵と迫害される「自己」との線引きを困難にした。もしかすると顔の見えない放射能による危機は、ハティニに代わって政治的な困難なしに戦争の記憶を代理表象する機能を果たすのかもしれない。

◉注

＊1　ソ連の戦死者数についてはEllman and Maksudov（1994）、ベラルーシについてはРаков（1969）、Шахотько（1985）を参照した。

＊2　クロパティ事件をめぐる調査と論争についてはMarples（1994）を参照。

＊3　Праўда Хатыні（BelSat, 2008）.

＊4　くわしくは公式サイトを参照。http://www.khatyn.by/en/

＊5　アルヴァックス（一九八九）。もちろん個人の記憶があって集団の記憶が成り立つとも考えることは可能であり、両者は相互依存の関係にある。

＊6　アレクシエービッチ（二〇一一）。本文ではより原語に近いスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチを用いる。

◉参考文献

アルヴァックス、モーリス（一九八九）『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社。

アレクシエービッチ、スベトラーナ（二〇一一）『チェルノブイリの祈り――未来の物語』岩波現代文庫、松元妙子訳、岩波書店。

スパイヴィ、ナイジェル（二〇〇〇）『ギリシア美術』福部信敏訳、岩波書店。

マール、エミール（二〇〇〇）『中世末期の図像学』下巻、田中仁彦他訳、国書刊行会。

Ellman, Michael and S. Maksudov (1994) Soviet Death in the Great Patriotic War: A note. *Europe-Asia Studies* 46 (4): 671-680.

Dedijer, Vladimir (1990) *The War Diaries of Vladimir Dadijer*, vol.1.

Marples, David R. (1994) Kuropaty: The Investigation of a Stalinist Historical Controversy. *Slavic Review* 53 (2): 513-523.

Rudling, Per Anders (2012) The Khatyn Massacre in Belarussia: A Historical Controversy Revisited. *Holocaust and Genocide Studies* 26 (1): 29-58.

Tumarkin, Nina (1994) *The Living and the Dead: The Rise and Fall of the Cult of World War II in Russia*. N.Y.: Basic Books.

Адамович А.М. (1982) Хатынская повесть. *Собрание сочинений в 4 томах*. Т.3. Минск. С. 5-198.

Адамович А.М. (1983) В соавторстве с народом. *Собрание сочинений в 4 томах*. Т.4.Минск. с. 235-276.

Адамушко В., Валаханович И., Кириллова Н. et al. (2009) *Хатынь: трагедия и память. Документы и материалы*. Минск: НАРВ.

Раков А.А. (1969) *Население БССР*. Минск.

Ушакин С. (2011) В поисках места между Сталиным и Гитлером: о постколониальных историях социализма. *Ab Imperio* 1: С. 209-233.

Шахотько Л.П. (1985) *Воспроизводство населения Белорусской ССР*. Минск.

Шамякін І.П. (2005) Злая зорка. *Збор твораў*. Т.6. Мінск: Мастацкая літаратура.

◉著者紹介

一六頁に掲載。